

半世紀前からの

「今、蘇る『文集』」

贈り物

蒲郡市民間大使
内田雅敏プロフィール
水竹町生まれ
東京弁護士会所属
著書「憲法読本」「戦後補償を考える」など多数

今号から、民間大使、内田雅敏氏のエッセイを連載します。氏に届いた懐かしい文集。それを読み返したとき、心の中に生まれたほのぼのとした思いを当時の蒲郡の様子とともにいきいきと綴っています。どうぞお楽しみに。

小学校の同級生T・Iさんから「いつつぼしー2ー宝飯郡蒲郡町立南部小学校」と題された黄ばんだ紙を綴じた「文集」が送られてきた。今から約半世紀前、昭和28年12月24日に発刊された、私に通っていた現蒲郡南部小学校（通称「蒲南」）2年生のと

きの文集だ。半世紀前のものだから、そっと扱わないとバラけてしまいそうだが、上質紙ではないものの、決して粗末なものではない。しかもガリ版刷りでなく、立派な活版刷りである。「いつつぼし」というのは、同学年が5クラスあったからだ。当時のクラス分けは、4月から生年月日順になっていて、1クラス50人余りの大所帯であったと思う。5クラスには、雪、月、花、松、竹と

いう洒落た名前が付けられていた。生年月日順のクラス分けなので、竹組は、もともと年少者の集まり、竹のようにすくすく育つようにという意味が込められていたのである。小学校の低学年のころは、同学年であっても学力はともかく、体力は、生まれた時期によって、ずいぶん差があったものだ。私は、昭和20年4月5日生まれなので、バリバリ(?)の雪組だった。(つづく)

みんなで考えまい!

蒲郡のまちづくり

「都市計画マスタープラン」



まちづくりは行政がやるんじゃないの?



「まちづくりは役所に任せれば良い」とか、

「気にはなるが、何していいかわからん」と、今までは、行政主導でまちづくりが進められてきたんじゃない。ほんで、関係者との合意が遅れる、事業が



みかん仙人
すなメリー

計画通りに進まんなど、時間とお金ばかりがかかる非効率な運営となつとる。行政の反省すべきところじゃない。



じゃ、これからはみんなの力でまちづくりだね



そうじゃ。「市民のみんながいきいきと暮らせるまち」をつくる、そう、まち



みんなの意向を反映した・都市計画が必要ってことだね



都市計画は、将来のまちの姿を描いた市民の「夢」であり、同時に、より良い環境

づくりの基本は、市民のみんなが「住み続けられる」まちをつくっていくことなんじゃ。そのためには、市民と行政が一緒になって考えた「安全で快適に暮らしていくことができるルール」が必要となつてくるんじゃない。

のもとで暮らしていけるよう、個人の権利を制限するルールでもあるんじゃない。だからこそ、まちのことを一番よく知っているみんなが、まちづくりの計画づくりから参加していくことが大切なんじゃないよ。

市では、市民参加による都市計画をつくって、みんなと一緒により良い蒲郡をつくっていくこうとしとる。わしが知ってるのはここまで。あとは、計画開発課で聞いてくれん。

計画開発課 ☎ 66-1142